

これからのチャイルド・スタディーズを展望して④

## 見つけて・驚いて・気づいたことからは始まる保育

宮里 暁美

(大学教授)

附属幼稚園、いずみナーサリーに次ぐ乳幼児施設である文京区立お茶の水女子大学こども園。平成28年4月の開園以来、大学生や日本各地の実践者、研究者が保育の実際に触れて学びを深めることができる機会を多く提案してきた。私は開園時より園長としてこども園に勤務し、園の保育者と共に実践と研究に携わり、その成果を書籍やDVDにまとめ広く発信してきた。子どもの「やりたい」が発揮される環境の在り方を追求する中で見えてきたことが、「見つけて・驚いて・気づいたことから始まる保育」である。こども園の中で大切に営まれていることを紹介する。

### さまざまなモノや人と出会い見入る時間を大事にする

子どもたちは小さな生き物に興味を示す。0歳児クラスの子どもたちは、小さなアリや小さなクモを見つけると、動かなくなる。静寂の中でじっと見続ける。「おや?」「あれは何?」と思う気持ちが広がり、言葉が交わされるきっかけになるのも小さな生き物との出会いである。小さな生き物と出会い見入っている時間を大事にし、保育者もその時間を共に過ごす。セミの鳴き声を聞けば「どこ?」と樹を見上げる。スイッと通り過ぎるトンボを見れば、その行先を確

かめないではいられなくなる。レイチェル・カーソンの言葉の中に「センス・オブ・ワンダー（神秘さや不思議さに目をみはる感性）」がある。体全体で吸収している姿だと考える。キャンパスの中を散歩すれば多くの学生に出会い、自然なかかわりが広がる。

### 気付きを表現し伝えあう喜びに共感する

子どもたちの日々の生活は驚きに満ちている。動かないと思っただけに見ていたセミが急にお腹を震わせて鳴き始めたり、ヤモリが卵を産んだり、チョウが羽化したりなど。その場に立ち会った子どもは、そこにいなかった保育者に出会えると、興奮して教えてくれる。目を輝かせて見たことを伝え、それが驚きと共に伝わったとしたら、「伝えることができた」という自信につながっていく。気付きを自分なりの言葉や動き、表情で表現し、伝えあう喜びを感じる生活が大切だと考える。経済産業省未来の教室「お茶大こども園ラボ」として取り組んだ探究プロジェクトの中でも、風で舞い上がるスカーフを見て思わず「あー」と声を上げ、その声が重なるように広がっていく0歳児の姿が報告されている。気付きを表し伝えあい、響きあう中で豊かさが育っていく。

### 「その時でしか味わえないものやこと」を大事にする

夏、急に空が暗くなり大粒の雨が降ってくることもある。テラスに出している靴箱などを慌てて取り込みつつ、この雨を子どもたちと見たいと願う。時折雷も鳴るときには、安全に注意しながら「今でしか味わえないこと」を味わうようにする。しばらくして雨が止み、空に大きな虹がかかったら外に出る。雨上がりの道、急に鳴き始めたセミの声など、心に残る情景になる。「夕方」

も大切にしたいことのひとつである。少し薄暗くなりかけた頃の自然は格別である。夏、日中は暑さが厳しく外に出られないので夕方の散歩を大事にする。その時その場でしか味わえないことがある。こども園は朝から夕方まで開所している。子どもたちが長時間いるからこそできる保育の可能性と望ましい保育の在り方について、さらに研究を深めていきたい。

### 子どもたちの周りに、いろいろな大人がいる

こども園には何でも作ることができる用務員の杉浦さん註5がいる。環境整備を担当しているが、木工が得意で子どもたちから「何でも作る人」として尊敬を集めている。杉浦さんは木工の他にも、コンポストを作って野菜作りに活かしたりしている。野菜が育つ周りには小さな生き物が集まってくる。コンポストの中をのぞくと、落ち葉が土になっていく様子を見ることができたり、土の中にミミズや幼虫を見つけて大騒ぎすることになったりする。他にも生き物博士のMさん、縫い物が上手なOさんなど、子どもたちの周りにいろいろな大人がいることが、子どもたちや保育者の体験を豊かなものにしていく。

### 保護者を巻き込み、体験を共有する

子どもたちが感じていること、夢中になっていることを保護者と共有することを目的として「ワクワクデー」という取り組みをしている。年6回、土曜日に開催する。親子で参加する自由参加の企画である。大学内にあるという利点を生かし、キャンパスの中でダンゴムシを見つけたら、秋の虫探しをしたり。日本昆虫協会の方をゲストとして招き、家庭で虫を育てるコツなどを教え

でもらったりもした。保護者の中に眠っていた子ども心に火がつき、目を輝かせて虫捕りを始めるお父さんが出てきたりした。保護者を巻き込むことで、楽しさが広がることを実感している。他にも、日々の保育をドキュメンテーションやポートフォリオにして保護者に向けて発信することも大切に積み重ね、その可能性と方法について研究している。<sup>注6</sup>

「見つけて・驚いて・気づいたことから始まる保育」の中で大切にしていることをまとめた。園生活の中でさまざまなモノや人、コトと出会う中で営まれていく保育である。そこでは日々さまざまな物語が紡がれている。ここから始まる学びを広げていきたい。

## 注

- 1 宮里暁美監修『0～5歳児子どもの「やりたい！」が発揮される保育環境』学研プラス 2018年  
宮里暁美編著『思いをつなぐ保育の環境構成 0～1歳児クラス編 2～3歳児クラス編』4・5歳児クラス編』中央法規出版 2020年
- 2 文京区立お茶の水女子大学こども園協力 DVD『ある認定こども園の挑戦Ⅲ 創る・織りなす保育』都市部での保育のこころみ』岩波映像株式会社 2018年
- 3 レイチェル・L・カーソン著 上遠恵子訳『センス・オブ・ワンダー』新潮社 1996年
- 4 「お茶大こども園ラボ」幼児期の教育・保育探求プロジェクト開発「経済産業省「未来の教室」2019年
- 5 日本保育学会第73回大会ポスター発表「『創る』が身近にある保育環境の意味を探る」2020年
- 6 日本保育学会第72回大会ポスター発表「ポートフォリオを使って子どもの育ちを共有する」2019年